

- | | | |
|-----------------------|--------|----------|
| 1. 事業細目：淡水真珠緊急対策調査研究費 | 予算額 | 10,000千円 |
| 2. 研究名：真珠漁場開発研究（天然漁場） | 予算区分 | 県単 |
| 3. 研究期間：昭62年度～ 年度 | 4. 担当者 | 氏家、太田、高橋 |

5. 目的

イケチョウ貝の育成不良の原因を究明するとともに、その対策を講ずる資料を得るため天然漁場における稚貝と成貝の育成調査を実施した。

6. 方法

(1) 稚貝育成調査（昭和63年4月～12月）

矢橋、志那、赤野井沖と柳平湖、平湖、および西ノ湖の計6漁場で実施した。

供試貝は真珠母貝漁協が昭和62年に種苗生産した1⁺年貝（平均殻長20.6mm、平均体重0.3g）を用いた。養成は、丸型コンテナ（ $\phi 36 \times H 8$ cm）に約2mm目以下の河砂を厚さ5cmに敷詰め、供試貝を50個体収容した後、1漁場に4～6コンテナを水面下60cm～70cmの位置に垂下した。

調査は毎月または隔月に1回、現地で気象水象調査を行った後、1コンテナ分を水試へ持ち帰り、体型について計測し、既存資料等からの比較検討を行った。なお、供試貝は計測後、再度漁場へ収養し調査を継続した。

(2) 成貝育成調査（昭和63年5月～12月）

昭和61年産2⁺年貝（平均殻長53.9mm、平均体重10.2g）を供試貝30個体とし、稚貝育成調査方法に準じて実施した。

7. 結果の概要

(1) 稚貝育成調査（図1、図2）

漁場間の成長を成長倍率（体重）で比較すると、平湖、矢橋沖では約12倍量の成長が見られたが、赤野井、西ノ湖、柳平湖では、約6倍量の成長であった。

志那沖では、鵜の鳥害と思われる事故のため、9月以降調査を中止した。

月別の育成傾向は、漁場間で成長に差が見られたが、既ね供試1ヶ月後の6月から10月末頃までは顕著な育成を示し、その後停滞する傾向であった。

期間中の生残率は、平湖が32%、赤野井30%、西ノ湖22%、矢橋14%、柳平湖では2%であった。

これらの結果と前年結果とを比較すると、平湖での育成が成長、生残ともに前年を大きく上回ったが、赤野井漁場では前年を大きく下回った。その他漁場ではほぼ前年並であった。

(2) 成貝育成調査（図3、図4）

漁場間の成長を成長倍率で比較すると、平湖、矢橋沖で約2倍量の成長が見られたが、

西ノ湖、柳平湖では、約1.5倍量の成長であった。赤野井漁場については、供試時体型を検討したところ有意差を認め、図4で比較するのは困難であるが、成長曲線等から見て西ノ湖、柳平湖と同程度の成長であったと思われる。

月別の育成は赤野井を除く漁場では1⁺年貝とほぼ同様傾向であった。

期間中の生残率は93.3%～100%と高かった。

赤野井漁場での成長劣化は、前年同様7月頃から10月頃までマイクロステスやアナベナの大量発生が成長阻害の一要因と思われた。

本年度の育成は、漁場間で差は見られるものの、育成の良かった昭和50年頃に比較すると稚貝、成貝ともに、1/3～1/4量の育成であった。

8. 主要成果の具体的数値

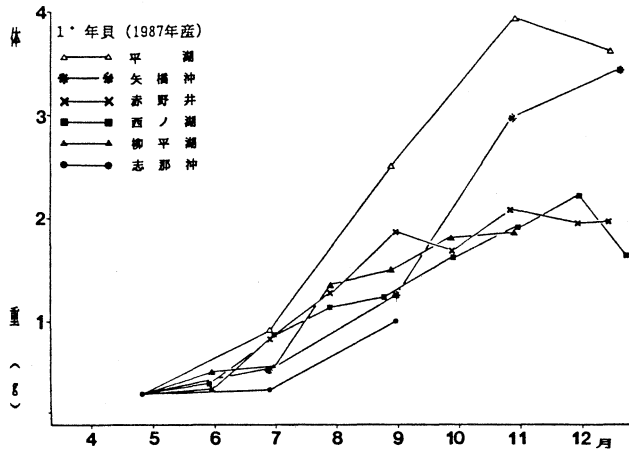


図1 昭和63年度稚貝の漁場別育成状況

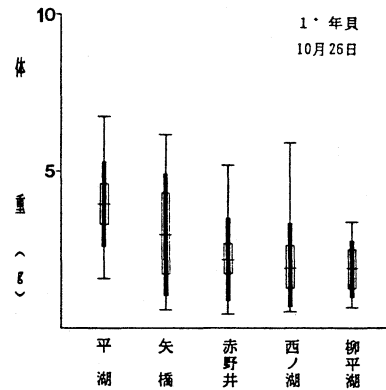


図2 稚貝育成調査結果の比較

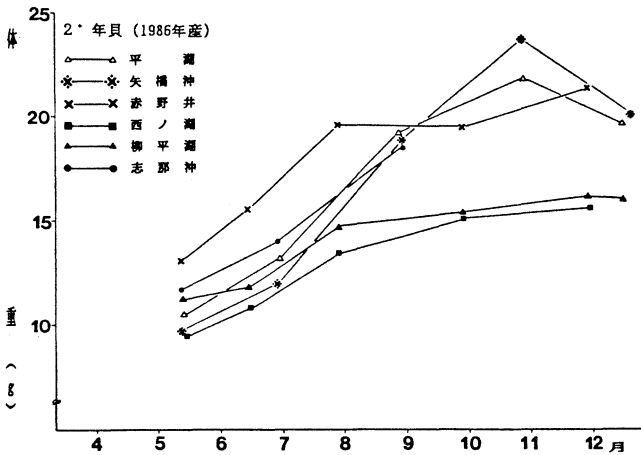


図3 昭和63年度成貝の漁場別育成状況

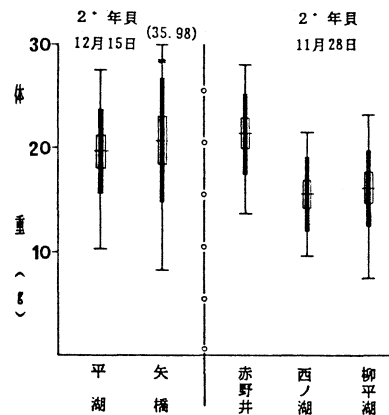


図4 成貝育成調査結果の比較

9. 今後の問題点

図2、図4に示すように、稚貝、成貝共に成長量のバラツキが大きいことは、供試貝の由来や活力(形質的、環境面)に問題があったのではなからうか。また、2⁺年貝では赤野井、柳平湖、西ノ湖で8月以降成長が停滞する原因の究明が必要である。

10. 次年度の具体的計画

仔貝(0⁺年貝)の育成状況のは握および、優良仔貝から母貝までの選抜飼育を行う。8月頃の水底質、餌量環境、有害物質等と成長との関係を主眼においた、稚仔貝の育成調査を行う。